

氏名(本籍)	堀池信夫(静岡県)				
学位の種類	文学博士				
学位記番号	博乙第524号				
学位授与年月日	平成元年7月31日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	哲学・思想研究科				
学位論文題目	漢魏思想史研究				
主査	筑波大学教授	文学博士	高橋	進	
副査	筑波大学教授	文学博士	工藤	喜作	
副査	筑波大学教授		広神	清	
副査	筑波大学教授	文学博士	野口	鐵郎	

### 論 文 の 要 旨

本論文は、漢魏時代を、漢の高祖劉邦が漢王朝を創建してより、新、後漢、魏を経て、西晋朝が南渡するまでの約五百年とし、その間における思想の歴史的展開を、宇宙観の変遷と人間の理性の展開という視点から見通した、思想史の一側面についての特殊研究の成果である。本論文は、研究上、方法論的なものと具体的なものとの二つの目的を持っており、両者は互いに有機的・重層的な関係にあって、後者の論証のために前者が用いられる。著者によれば、第一の方法論的目的は、中国思想史研究に従来とは異なる新しい視点を導入して、政治思想史的研究ないし訓詁名物の学から脱却し、中国科学史研究や宗教思想史研究の成果を受容し、これを古典的な経学的研究の枠に組み込んで思想史把握の基盤に置くことであり、第二は、第一の方法の実践領域である漢魏思想史固有の問題の解決を目指したものである。即ち、従来漢魏の思想史には、漢代思想は古代史の末端に位置し、魏晋以下は中世に属するという定論的認識があり、そのため両時代は断絶的に捉えられがちであったが、本研究ではその間の思潮の継続・断絶の両側面の合理的必然的な解明を意図するものとして

いる。

これを具体的にいえば、著者は、漢代を天文学と呪術の混淆した宇宙論的天の思想の展開した時代と捉え、これに対して魏晋時代は天文学が停滞し、人間の内なる精神が重視され、哲学的・宗教的思索が進展した時代とみている。

論文全体の構成は、序論に続いて、第一章を6節に分け、第二章を4節に、第三章を3節に分けて論述し、索引等を含めて600ページ余に及んでいる。なお、本論文は既に著者として印刷公刊(1988年11月 明治書院)されたものである。

序論は、3節から成り、まず思想史展開の背景となる漢魏時代の文化的状況を資料に基づいて論

述し、次いでこの時代の伝統的な経学の立場からの思想解釈を要約的にまとめ、終わりに本研究の基本的立場である、漢代を宇宙論の時代、魏晋を内的思惟の時代という鳥瞰を、幾つかの実例に基づいて予め提示している。

第一章は、従来の経学中心の思想史とは異なる新しい視点からの研究で、第一節では、前漢期の宇宙論と形而上的の思惟には科学性をもつものと呪術的なものがあることを、『淮南子』と董仲舒の思想を取り上げて解明している。第二節では、天文暦法と音律とが結びついた律暦思想の形成を論じ、天文科学と音響物理学に基づく数理の根源的な役割と、更にそれが前漢経学の真理性の客観的基盤として機能していたことを論証する。第三節では、前漢における儒教の礼思想と法治思想との軋轢を通じて、儒教が次第に国家学的性格を強めていくことを論じ、その理論的整備の過程には実は律暦思想による数理的思惟が重要な働きをしていたことを詳論する。第四節は、『周礼』が前漢末に重視されるに至ったのは、同書に宇宙論的の思惟傾向と律暦思想に合致する数理性とが内在することを析出し、この時期に『周礼』表章の必然性があったからであることを論証している。第五節は、揚雄の『太玄』の思想的本質が、前漢当時の易学と律暦学とを数学的に統一する営為であったことを発見し、これを証明している。第六節は、『楚辞』等により宗教神秘主義的の神仙思想が次第に知識人の信仰の対象から外れていくことを解明し、当時の人間の内面への思弁と天文律暦思想との表裏関係が、漢代の宇宙論的の思惟を補完するものであったことを論ずる。

第二章は、後漢期の思想研究で、律暦思想の欠陥が発見され、経学の真理性を支えられなくなり、天文学は科学としての独自性を強め、経学も次第に科学とは離れていく過程を解明する。第一節は、律暦思想の崩壊過程の研究で、後漢の天文家たちが天象の観測を合理的に進めた結果、律暦の数値に合わない暦法上の事実が発見され、他方、前漢京房の六十律の精密な音律計算の意味が判明するにつれて、律暦への疑念が強まり、律暦思想がその指導力を失っていく経緯を、『後漢書』「律曆志」の分析によって究明する。第二節はその補論で、天文学から離れた経学が当時興隆しつつあった呪術的な図讖の思想に接近するものと、これを拒否するものと大きく分離し、前者には礼制の大改革を計ろうとするものが現れ、後者には経書の文献学的研究を志向するものが現れてくることを論じている。第三節は、これらと傾向を異にする客観的合理的な精神をもって時代に対処した知識人を論じ、第四節では、後漢末の転換期に図讖と文献学と合理的な精神とを体系的に総合した何休の公羊学と鄭玄の周礼学、更に鋭い現実直視と批判的精神をもった荀悦や仲長統の思想を採り上げこれを詳論している。

第三章は魏晋期の思想を扱い、まず第一節では、この時期を代表する何晏・王弼の形而上的な貴無思想を中心に、当時の知識人の人間の内面へ向けられた思想傾向を論じ、第二節では、裴頠の崇有論を採り上げ、その『老子』解釈が王弼のそれと対極をなすことを論証し、更に従来主として政治思想的に解されていた阮籍・嵇康の思想を神仙思想を中心に宗教思想の立場から分析し、その特質を明らかにしている。第三節は、晋代の最も重要な思想家と認める郭象を採り上げ、その『莊子注』における「自得」の概念を中心に究明し、結果的にそれが前代の貴無思想と崇有思想とを承け、止揚するものであることを明確にした。

## 検 査 の 要 旨

従来漢魏の間の思想史には、漢代思想は古代思想史の末端に位置し、魏晉以下は中世思想に属するという認識が定論的にあり、そのために両時代の思想は断絶的に捉えられる傾向があり、その思想的推移を必然的なものとして合理的に説明し得ず、また、研究史的にもこの時代は経学中心ないしは道・仏両教に配慮を示しつつも基本的には経学中心の記述をするのが支配的であった、というのが著者の見解である。然るところ、著者は、方法論的に中国科学史研究や宗教史研究の成果を受容し、これを古典的な経学的研究の枠組みに組み込み、みずからも数理に基づく律暦思想や音律理論の詳密な研究により、漢魏思想史研究において従来知られていなかった多くの新しい知見を提示し得た。例えば、前漢期の宇宙論と形而上的の思惟には科学性をもつものと呪術的なものがあること、天文暦法と音律との結合による律暦思想の形成過程における数理の根源的役割と、それが前漢経学の真理性の客観的基盤として機能していたこと、『周礼』に内在する宇宙論的思惟傾向と律暦思想に合致する数理性の析出により、前漢期思潮のもとにこそ同書表章の必然性があったことなどの論証、後漢期思想における経学と律暦思想との分離過程の解明、等々は特に注目すべき成果であって、関係学界に寄与するところが大であると認められる。

然しながら他面において、本研究が、漢代を天文科学と呪術の混淆した宇宙論的天の思想の展開した時代、魏晉時代を天文科学が停滞し、人間の内なる精神が重視され、哲学的・宗教的思索が進められた時代と大きく捉えるため、過渡的思想の内容・性格の闡明が不十分であること、また前後漢期の天人感応思想などは漢魏を通してみるべき重要な思想にもかかわらず魏晉期に消滅したとして通観していないこと、周易思想や漢代象数易の位置付けがなされていないこと、超自然・存在論・形而上学等々の西洋哲学に用いられる術語が無謀介に使用されている箇所があること、『老子』における「自然」と王弼の「無」の思想との関係的考察がみられないこと、等々は今後の著者の研究と留意に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば著者の斬新な研究方法と広範にして緻密な研究の営為・努力の成果は、学界に貢献するところが大であると認められる。

よって著者は文学博士の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。